

Dr. ジーアの My カルテ

全農家畜衛生研究所
クリニックセンター



子牛の下痢対策

例年通りの暑さが過ぎ、やっと過ごしやすい季節となりました。
この時期は昼夜の寒暖差が大きく、咳や下痢等、病気が発生しやすい時期です。
なかでも下痢は、食べた栄養が腸からきちんと吸収されず、
牛の活力が低下し、その後の発育が回復するまで時間がかかってしまいます。
今回は特に重要な幼齢期の下痢対策について紹介します。

● 幼齢期の下痢の多様な原因

幼齢期における下痢の原因はさまざまですが、同じような日齢の子牛に下痢が集団発生する場合、病原体による下痢が疑われます。

下痢を引き起こす病原体にはロタウイルス、コロナウイルス、大腸菌、サルモネラ、クロストリジウム、クリプトスポリジウム、コクシジウム等があり、これらの病原体への対策を表に記載しました。

下痢が発生すると抗菌剤を使用しがちですが、それ一辺倒では対処しきれない場合が多々あります。例えば、ロタウイルス、コロナウイルスやクリプトスポリジウム、コクシジウム等の寄生虫には抗菌剤が効きません。

一方、ロタウイルスやコロナウイルスによる下痢は、母牛にワクチンを接種し、初乳を介して子牛に免疫を付与する方法があります。

この方法で大事なことは子牛に初乳を確実に給与する事です。初乳給与は分娩後2時間以降に子牛が哺乳欲を示したらできるだけ早く、飲みただけ給与します。初乳の初回

給与量の目安は3L以上、遅くとも6時間以内の給与が理想です。

更に、子牛の下痢対応で重要なのは早期発見と適切な水分補給です。まず糞の状態・活力・体温等をこまめにチェックしましょう。ミルクの飲みが悪かったり、眼球部分がくぼんでいたり、皮膚をつまんでもすぐ戻らないような場合は、水分補給が必要です。重症に陥り点滴対応になってしまう前に、経口補液をこまめに実施しましょう。

● 日常の管理の見直し

下痢対策でもう一点重要な事は、子牛の周辺環境に悪いところがないか、日頃の管理面の見直しです。子牛の下痢が軽症で済むか、重症に陥るかは、日常の飼養管理による

ストレスの大きさが影響を与えるからです。

例えば、幼齢期に母牛から母乳を飲ませる場合は、母牛へ餌の増し飼いをを行い、分娩後の母体回復と母乳産生をケアします。また、代用乳を給与する場合は、子牛への給与量を見直したり、使用器材の洗浄・消毒法を見直したりする事などが必要です。

本格的な寒冷期の到来前に、子牛の牛房の消毒、暖房器具の準備、すき間風対策としてコンパネの設置、ネックウォーマーの用意などを実施してはいかがでしょうか。

「下痢が出たら治療すれば良い」ではなく、子牛が下痢しない環境づくりへの日常からの心がけが下痢対策につながります。

表. 幼齢期に問題となる主な病原体と対策

区分	病原体	対処法
ウイルス性	ロタウイルス	母牛へのワクチン接種・初乳の確実な給与、子牛への生菌剤、整腸剤、必要に応じて補液 等
	コロナウイルス	
細菌性	大腸菌	子牛への生菌剤、整腸剤、抗菌剤の使用、必要に応じて補液 等
	サルモネラ	
	クロストリジウム	
寄生虫性	クリプトスポリジウム	子牛への活性炭、生菌剤、整腸剤の使用 等
	コクシジウム	